

015-073 薬害 HIV 感染血友病等患者の施設における受け入れ促進と支援体制の整備

大金美和 (おおがね みわ)¹、阿部直美¹、小山美紀¹、谷口 紅¹、
木下真里¹、杉野祐子¹、中澤 伸²、島田 恵³、柴山志穂美⁴、石原美和⁵、
岩野友里⁶、久地井寿哉⁶、柿沼章子⁶、大平勝美⁶、池田和子¹、塚田訓久¹、
田沼順子¹、濁永博之¹、菊池 嘉¹、岡 慎一¹、木村 哲⁷

(¹ 国立研究開発法人国立国際医療研究センター エイズ治療研究開発センター、² 社会福祉法人川崎聖風福祉会、³ 公立大学法人首都大学東京健康福祉学部看護学科、⁴ 公立大学法人埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科、⁵ 公立大学法人宮城大学看護学群・大学院研究科、⁶ 社会福祉法人はばたき福祉事業団、⁷ 東京医療保健大学)

【はじめに】先行研究では薬害 HIV 感染血友病等患者における 50 代の支援体制の脆弱性が指摘され、介護の必要性、長期療養における医療依存度の上昇、親看取り後の支援者不在と孤立から施設入所の必要性が増している。今回、一旦は患者の入所を断念した A 施設に対し患者受け入れを促進し、入所後の患者対応におけるスタッフ支援を目的とした支援体制を整備したので報告する。【目的】薬害 HIV 感染血友病等患者における施設の受け入れ促進と、患者対応へのスタッフ支援を目的とした支援体制を整備する。【対象】療養施設の施設長、常駐看護師、ケアマネジャーのコアメンバー 3 名【方法】受け入れ要請に対する全スタッフ（介護士、看護師）から抽出した問題や課題の整理、スタッフ向け研修会による施設入所の促進、入所後に発生する問題や課題に対するスタッフ支援の対応手順を整理した。【結果】受け入れの抵抗感は、「感染不安」と「有事（体調不良や急変時）の対応不安」があり、事前の研修会、患者ケア経験のある施設の見学により感染不安が軽減、近隣の医療機関との連携、専門医療のバックアップ体制を合わせた保障が有事の不安を払拭し入所に至った。諸問題の発生によりスタッフの支援が滞らないよう各職種の相談窓口を明確にし相談内容別に対応者を選定したことで、医療福祉の連携、支援の充実につながった。【考察】地方における専門医療のバックアップ体制の保障は生活圏と病院が遠距離のため困難が予想される。薬害被害救済の個別支援では専門医療を可能とするブロック拠点病院等の周辺施設の入所の検討が必要になると考える。

015-074 HIV 感染血液凝固異常症における肝炎の病期と治療状況の推移：2017 年度の調査より

立浪 忍 (たつなみ しのぶ)¹、天野影裕²、白幡 聡³、大平勝美⁴、
花井十伍⁵、杉山真一⁶、桑原理恵⁷、秋田美恵子⁸、瀧 正志⁹

(¹ 聖マリアンナ医科大学 医学情報学、² 東京医大臨床検査医学、³ 北九州八幡東病院、⁴ はばたき福祉事業団、⁵ ネットワーク医療と人権、⁶ 原後綜合法律事務所、⁷ 聖マリアンナ医大臨床研究データセンター、⁸ 聖マリアンナ医大小児科、⁹ 聖マリアンナ医大横浜市西部病院小児科)

【はじめに】HIV 感染血液凝固異常症では、C 型肝炎ウイルス (HCV) に起因する肝硬変、肝癌、肝不全などが報告されている。今般は、現在の肝炎の病期と肝炎治療薬の使用状況を集計した。とくに、2004 から設けた選択肢である「治癒」の報告数の、経時的な累積率を算出した。【方法】2017 年度の「血液凝固異常症全国調査」に報告された HIV 感染例と HIV 非感染例の双方について解析した。【結果】HCV の感染が報告されている症例の全体としては、慢性肝炎、肝硬変、肝癌、肝不全の割合は、42.7%、8.4%、2.8%、0.16% (HIV 感染例) および 47.8%、2.8%、2.9%、0.05% (HIV 非感染例) であった。2017 年の調査では、肝庇護剤については 99 例 (HIV 感染 42 例、HIV 非感染 57 例)、インターフェロンあるいは Peg インターフェロンとリバビリン (単剤使用も含む) については 7 例 (HIV 感染 3 例、HIV 非感染 4 例) の報告があった。インターフェロンを使用しない直接作用型抗ウイルス薬 (DAA- インターフェロン・フリー) の使用報告は合計 117 例 (HIV 感染 48 例、HIV 非感染 69 例) であった。治療による「治癒」が報告された例の割合は、2004 年調査時点では HIV 感染例・HIV 非感染例ともに約 3% であったが、2017 年の調査では 30% (HIV 感染例) および 21% (HIV 非感染例) であった。2016 年調査からの上昇は、それぞれ 5.3% (HIV 感染例) および 2.5% (HIV 非感染例) であった。【結語】2016 年から 2017 年までの 1 年間で、治療による「治癒」の割合が上昇した背景には、本調査の範囲では治療薬の詳細な効果評価は困難であるが、直接作用型抗ウイルス薬の関与が示唆される。肝炎の状態と治療に関する報告数は、今後も引き続き集計して行くことが必要であろう。【謝辞】平成 29 年度 (2017 年度) の血液凝固異常症全国調査にご協力頂いた皆様に深く感謝致します。